

## 一 学期の作文指導

### I 四月当初の子どもたちの実態

四月の初めのある日、ちよつとした感想を書いてもらおうとしたときのこと。

「これから、作文を書いてもらいます。」といったとたん、「エーッ！いやや。」という声があちこちから起こった。それで、どのくらい嫌いな子がいるのか、嫌いなわけは何かをたずねてみた。

「書くことががてだ、きらいだ、という人、手をあげて。」

というと、クラスの半数以上、二十一人が手をあげた。好きでもないが、嫌いでもないという子が7〜8人、好きだという子は0人だった。

「なぜ、書くことが嫌いなのか。」については、次のような理由だった。

①書くのがめんどくさい。(考えて書くのがめんどくさい)

一番多い理由がこれだった。読むことに比べて書くことはかなりの集中力を要する。何を、どのように書いていくか、を考えつつ書くにはたいへんなエネルギーを要する。その持続力がまだ三年生には弱い。だから子ども自身に書く必然性がない場合は、たまらなく苦痛な作業になるのだろう。

②どう書いたらいいかわからない。

これも多かった。何について書くかははっきりしていても、どんな場面を選ぶか、書き出しをどうするか、などあいまいな部分は多く、自分の頭でどう整理したり、構成していくかがむずかしいのだろうと思う。

③書くことがうかばない。

これは、日記など自由に書かせる場合に多い。まだ文を書き慣れていない、あるいは作文を読み慣れていないために、どんなことが書く材料になるのかが見えないために、せっかくだがいろいろなすばらしい材料が自分の身の回りにもあっても拾い上げられないのである。

また、子どもたちの書いた文章を読んでもみると、記述上の問題もいろいろ見えた。

- ・「」がつかえない。
- ・「は」と「わ」の区別がまだあいまいな子がいる。
- ・漢字が使えない。
- ・カタカナを使うべきところを平仮名で書いてしまう。  
ぶうめらん
- ・とうる。(とおる) ゆう。(いう) おねいちゃん(おねえちゃん)など用字のまちがい。

その他に、書くことの土台の問題として、左ききの子が2名いた。右手でも書けないことはないが、極端に時間がかかるため、どうしても左手で書くことを黙認してしまい、結果的に右手の訓練ができない。字の乱雑な子もかなり多かった。鉛筆の先がまるまっても気にならない感覚がしみついている。

こうした実態から出発することになったわけである。とりあえずは書くことが好きとまではいなくても、嫌いではない、というぐらいにはなってもらいたい。そんなつもりで始めていくことにした。

## II 作文指導の基本的な構想

### ①書き慣れること

「習うより慣れる」のたとえ通り、まず、何はともあれ書く機会をさまざまな形で作っていかうと思った。

年度初めに考えたことは、次のようなことである。

週1時間は作文の時間として確保する。

それ以外に、毎日帰りの会でその日のできごとを題材として5分間日記を書かせる。短い感想を授業の後などにこまめに書かせる。

「視写」を日常的な学習に組み入れていく。

②書き方の技術的な内容を段階的に入れていく。

週一回の作文の時間を中心に次のような内容を一学期の学習課題として指導していこうと考えた。

①時間の経過にしたがって順序よく、詳しく書くこと。

複雑な構成の文章は、まだ三年生の一学期には要求しない。ちょうどビデオテープのある部分を切り取るように時間の経過通りに書き綴っていく基本的な方法で、どの子も書けるようになることをねらう。

②「」の文を使って書くこと。

文章を生き生きとしたものにする一番即効的な手法は、会話文をいれることである。

③目・耳・鼻・触覚を生かした文も綴れる。

五感を働かせて書いた文が書けるようになると、文章がいつそう生き生きとしたものになる。

③作文を読み合う場の設定

書きっぱなしでは、なかなか成果も上がらないし、書くことを楽しむ雰囲気も生まれにくい。日常的に日記などを読み合う場を作ることが大事である。

今年度は、「ごつつん子」という学級記録を発行している。その中で、日々の日記を取り上げ、読み合う

ことにしていく。

### Ⅲ 一学期の取り組み

#### ①言葉のスケッチ

教科書の4月教材に「作文ノート ことばのスケッチ」というのがある。書くことがあまり好きではない子への誘いとしては良い方法なので、私もよくやる手法なのだが、次のような授業を1時間組んでやってみた。

#### 【作文の勉強1】 ことばのスケッチ

《授業記録》

T 先生がこれからすることをよく見ていて、それをことばで書いてもらいます。

いいか、いくぞ。(すばやくすわる動作をする)

C はい、ここまで。今、先生がしたことをノートに書いてください。

C エーッ！ わからなかった。

ちよつとでも書いたらええんやろ

(などとワイワイ言いながら、それでも書く)

T では、1ぱんの4人の人に、今どんなふうに先生をスケッチしてくれたか、聞いてみます。義嗣君

義嗣 「あわてていすにすわった。」

絵美子 おんなじ。

朋子 「先生がいすにすわった。」

和生 おれ、よつちゃんとおんなじ。

T では、今、義嗣君が書いたのと、朋子ちゃんが書いたのをくらべてみましょう。

義嗣君のより、朋子ちゃんの方がええなあ、と思うことが一つあります。何でしょう。見つけて下さい。礼子 だれがしたか、書いたる。

T ほや！だれがしたか、これ、ぜったい大事やもんね。

はい、こんどは、反対に義嗣君の方が、朋子ちゃんよりいいなあ、と思うところが一つあります。

C ハイ！

T 朋子ちゃんは、自分で見つけたね。

朋子 「あわてて」

T そうや。先生は、こんなふうに、ゆっくり（動作しながら）すわらなかつたね。パパッとすわったからね。

C ぼく、そう書いたで！

T じゃ、もつとくわしく書いた、いう人手上げて。

しょうかいしてください。淳くん。

淳 「先生が、すぐくあわてていすにすわりました。

T 「すぐくあわてて」こちらへん、よく目を働かせていますね。清志君

清志 「先生があわてて、がたがたいわせていすにすわった。」

T すごい！今、清志くんは、何をしたらかせましたか。

C 耳！

T 「がたがたと」音を立てて。はい、耳を使った。

亮輔 「先生は、はしやいでいすにすわった」

T おお、これは、すごいぞ。亮輔くんは、ただ、いそいでじゃなくて、なんか、先生がはしやいでいるようだって。これは、どこを使っているのでしょうか

C 頭！

T そうやねえ。のうみそをつこてやるんやね。

雄介 「先生が「せーのードン」でいすにすわった。」

T また、ちがうのを見つけた。  
先生が「せーのードン」と言っつてすわった。これも耳をはたらかせてやるんやけど、先生が言ったことばも書いてやる。

T じゃ第2問。こんどは、先生が、入口から入っつてきてすわるところまで、を書いて下さい。

(教室の入口から入っつてきてすわる。みんな、ゲラゲラ笑いながら見ている。)

C (1回目とちがっつて、みんな、ぐんと勢いこんで書き出す。)

T さあ、たった5秒ほどのことをだれが一番くわしく書いてくれるかな。

じゃ、基臣君から聞いてみよう。

基臣 「先生がせきばらいをしていすにすわった。」

T 「せきばらいをして」すごい言葉を知っつてますね

礼子 「先生が、入っつたときにせきをして、えらそうにあるいてまたを大きくひらいていすにすわった」

憲孝 「先生がごほんといいながら、すぐくえらそうにいすにすわった。」

T ほうら、満君なんて、ちっつとも書くこときらいっつて思えんぐらいにじょうずに書いてるやん。

清志 先生があるきながらきて、とをあげたら、おほんと声をだして、またあるいて、とまっつて、ずぼん

をあげてから、ゆっくりいすにすわった。」

浩美 「先生が、ろうかから、ごほんとして、なまいきにしていすにすわった。」

美奈 「先生が、ドアをガラガラとあけて、おほんとゆっくりいばつた顔で、ずぼんをあげていすにすわった。

賢一 「先生が、ゆっくりおほんといっつて、まえにきてズボンをあげて、ゆっくりすわった。」

亮 「先生が、しずかにドアをあけて、おほんといっつてじゃいあんみたいにえらそうにすわった」 (笑い)

T 「ジャイアンみたいに」というところがおもしろいね。

智保 「先生がゆっくりあるいていすにすわった。ちよつといばつているみたいだつた。おほんとせきば

らいをしていすにすわつた。」

T ああ、今の智保ちゃんのいいのは、みんなは、一つの「。」で書きましたね。智保ちゃんは、3つぐ

らい使っつて書いてやるね。

満

「先生がはいってきて、せきをして、いすのところへいって、ずぼんをあげてすわった。」

この後、「1分間、教室の友達のようにすを見て書く。」「亮君の動作を見て書く。」  
といった練習をして終わる。

こういう授業で「言葉のスケッチ」の方法を教えたあと、ちょっとした空き時間などに、「言葉のスケッチの練習やってみようか」ということで何度もやっていた。  
「今日は、外へ自由に行ってスケッチしてきていいぞ。」と言った時などは、歓声をあげてとびだしていくのだった。

「こい」 山岡 沙余子

わたしが手をまわしたらこいが口をパクパクあけながらえさをくれるのかなと思ってとんでいました。こいがさめのようにシューといきました。さきちゃんが手をまたまわしたらこいが、

「パクパク。」

といていいながらザブーンととびました。わたししたちは、

「わあ。」

とびつくりしました。さわったらちよつとかたかった。ともちゃんが、

「人めん魚みたい。」

といった。

鵜野 めぐみ

こいがしろつめぐさをたべようとした。そしたらたべなかつた。

まさみちゃんが、

「あそこにいっぱいいるよ。」

といました。

うさぎごやにはいったら、一ぴきねていました。あつ子ちゃんが、

「かわいい。」

といました。（はやく赤ちゃんうんでね。）

② 言葉のビデオテープ

ある一瞬のできごとを写し取る「スケッチ」の学習の次に、少し長い時間の間を写し取る「言葉のビデオテープ」の勉強をやらせてみた。例えば、次の例のように保健の検査のようすを、教室を出たところから教室に戻ってくるまでの範囲で、うんと詳しく言葉で再現させてみる。教室に帰ってきたらすぐ書くことにしておけばかなり細かいところまで再現できるはずである。

「目と耳のけんさ」 黄土 敬志

「しずかにろう下にでましよう。しゃべったら、一からやりなおし。」

と先生がいました。

ぼくは、まちがえて、せのじゅんのようにならんできました。ほかのだけれが、何のじゅんといったら、

「名前のじゅん。」

と先生がいました。手あらい場のさいしよのかどっこでりようくんが

「かわって、やっぱあいいわ。」

といった。ずうつと行って、先生が、

「女の子はここでまって。男の子はついてきて。」

といました。ずうつとずうつと前に行って、ドアをあけてはいった。先生が、行ってから、だけれが、ただち先生にいった。

「本を読んでもいい。」

といった。ただち先生が、

「いいで。」

といった。左が2・0でみぎが1・5だった。そしてりようくんをまっていたけど、かずおくんが、

「おれまわっててくれや。」

といったけど、りようくんがきたからりようくんといっしょに行った。うわぐつをぬいで、ドアをあけてはいった。だけれかもいてた。しゃべると、

「この中では一さいしゃべるな。」

と先生がいった。まわっていると、つぎからつぎと、だんだんはいつてきた。男はおそかったから、少ししかこなかった。ばんが回ってくると、先生が、女に

「ほけん室にいきい。」

といました。そして三人ともすわった。左がぼくでまん中がりようくんで、右がりようすけくんだった。ゆうすけくんがいなから、ぼくが一ばんになった。さいしよに三人ともきこえなくなった。先生が、

「あれ、おかしいなあ。」

といった。もちかたがしらなかったから、りようくん



のもちかたをまねした。何かもちにくいなあと思いましたが、見ると線がからまっています。先生が、

「もおいいか。」

といった。だれかが、

「ちよつとまっつてえ。」

といったから、

「ちよつとまっつてえ。」

といました。まあいいやと思ってやりました。けん一くんらが、どういうふうになっているか、見ていました。先生が、

「ちかよるな。」

といった。とちゆうで、へんな音もきこえた。おわつたら、おいて、ぼくもけん一くんらのように見にいました。先生が、おこつていった。

「ちかよるな。」

といった。ぼくは、りょうくんとうろかに出た。

「はい、いこう。」

と、先生がいました。

ろうかでかにしくんが、ぼくのせなかをおしたから、（なんでしたのかなとおもいました。）ほけんしつにはいつて、（まだかなあ）と思いました。ぼくのぼんがきて、すわったら、（なんか口がこそばくなってきました。）きょうしつにかえつてくるとき、じゅんくんがまっつてくれました。じゅんくんが、「くちの中がこそばかったね。」ていました。

はのけんさ 中村 雅美

「はい、いこう。」

と、先生がいました。

ほけん室にはいつてぼんがくるまですわつてまっつていました。まっつていたら、あつ子ちゃんが、

「いみわかる。」

と、いきました。

またあつ子ちゃんが、

「いみわかるの。」

といました。

わたしは、

「いみわからない。」

と、いきました。

ぼんがきたから、

「おねがいます。」

とわたしはいました。

おわつたから、

「ありがとうございます。」

と、またわたしはいました。

ろう下にでました。でたらかおりちゃんがいたからいっしょに教室にもどりました。

③ 作文を書く

「言葉のスケッチ」「言葉のビデオテープ」などで培った力を出し切らせる場として、教科書教材

「くわしく思い出して」の学習に入った。

「かんのん山への遠足」という内容の教材だが、ちょうど、春の遠足が「太郎坊山への遠足」だったので、教科書の作文メモや文章がそのまま生きた見本になって、たいへん都合がよかった。

「太郎坊山への遠足」

「たのしくてえらかった太郎坊山」 松浦 功

登り始めはかいだんで、のぼってもものぼってもぜんぜんみえなくて、

「しぬー。」

といていました。金くんが、

「いさお、いっしょにいこう。」

といていました。ぼくは、

「うん。」

といていました。金くんがおそくなって、

「やせがまん。」

といていました。またおそくなって、金くんがまた、

「やせがまん。」

といていました。やっとちようじょうについて、

「つかれたー。」

といていました。まだちよつとかいだんがあったから、うえにいつて、人がいて、

「くつをぬいでうえにあがりなさい。」

といいました。うえにあがって、

「それをふって二回をたたいておがみなさい。」

といいました。ぼくたちは、なかにはいって、ふって、てを二回たたいておがみました。

かいだんをおりてさかをはしってえんめいこうえんにつきました。おべんとうをりょうくんとおうどあっちゃんとしんちゃんとしゅんくんであべました。りょうくんがびわをもってきてたべたくなりました。じゅんくんとぼくが、

「ちようだい。」

といって、りょうくんが

「いや。」

といいました。

「」をたくさん使って書く勉強をしましたでしたが、功君の作文を読むと、その勉強がよくできていることがわかります。「」があると、その場のみんなのようですが、ビデオで見るようにうかんできますね。

「たのしくてえらかった太郎坊山」

北岸 美奈

登り始めは、

「かるく登ろう。」

とかいってたけど、ひろばくらいのところまでいったら、

「ああえら。」

とか、

「ああつかれた。」

という声がよくきこえてきました。

ひろばをこえると、上野先生が、

「いま、こいずみ先生が見えた。」

といった。わたしは、もう、だまりこくってかいだんのですりを、うしろにおしてのぼっていきました。もう、せなかも、あしも、ぼうしの中も、あせでびっしょりです。(やつとのやつと)と思いつながら、いちだんいちだんのぼりました。もう、えらくて、えらくてはしつてしまいました。まだまださが見えてきません。さつきはしつたばっかりだったから、

「もう、一ぼもあるけへん。」

といった。やつと、うそつきがおるとしまるいわのところまできました。わたしは、ドキドキしながらとおりました。いわのあいだは、せまくて、はいつたとたんにすずしくなつて、せなかの汗も、あしのあせも、ぼうしの中野あせも、からだじゅうのあせが引つこんでしまいました。わたしは(ああすずしい)といった。いわといわのあいだは、こけみたいのがはりついて、ぬるぬるしそうです。やつとちようじようまでくると、見はらしがよくて、田んぼや町がきれいに見えました。ちようじようのくうきは、きもちがいいし、さつぱりします。

こんどは、ほんたいがわからおりました。登るのはたいへんだけど、おりののは、あしが下にいくから、らくちんです。すいすいおりにえんめい公園でおべんとうをたべた。あさこちゃんとちほちゃんとれいこちゃんとよつちやんでたべた。

——中略——

きのうはたのしかった。

美奈ちゃんは、教科書の作文を手本にして、文章のいいところをうまく自分の作文に取り入れていきますね。作文の勉強のはじめは、そういうこともどんどんやってみるといいのです。

書くことが嫌いだった子も、この学習ではかなりの文章が書けていた。最初の作文を書いた功君も作文は大嫌いだった子一人である。

#### ④ 日常的に書く 「5分間日記」

毎日書く場として、帰りの会での「五分間日記」を設定した。これは、作文の力をつけるといふよりも、むしろ、子どもたちがその日どんな学校生活を送ったのかを私がつかむこと、また、子どもの日記に私のコメントを入れることを通して、私と子ども一人ひとりのコミュニケーションのパイプとすることがその大きなねらいである。だから、表現上の気になることは私の手もとでチェックしておいて、直接日記の中で添削するようなことはしなかった。

最初のうちは、5分間日記は、すこぶる評判が悪く、「今日はやめとこう。」という声があちこちから出ることも多かった。一学期の終わりでも、「今日は時間がないので五分間日記はやめておきます。」というと歓声が上がるぐらいだから、子どもたちにとってまだまだ負担なのだろう。でも、この日記があるおかげで、生きた一学期の生活記録ができていくといつてよい。

有線放送からの依頼で、「今がんばっていること」という題の作文を書くことになったときも、この日記から材料を見つけて来る子がたくさんいた。「取材メモ帳」の役割も果たしていたわけである。

## 五分間日記から

毎日帰りの会で、その日のできごとで、心にのこったことを五分間日記として書いてもらっています。この1週間のできごとをその中からひろってみましょう。

「きゆうしよく」(4/・)

中村 雅美

きょう、きゆうしよくの時間になったから、さくらの木のちかくできゆうしよくをさかてさんといっしょにたべました。わたしは、三年生はいいなとおもいました。また、外でたべたいです。

「タイヤとび」(4/・)

荒木 朋子

朝マラソンのあとに、大きなタイヤがとべないから、れんしゆうしました。あともうすこしで、とべるようになるから、がんばってとべるようにしたいです。

「50メートル走」(4/・)

居嶋 紗喜子

きょう学校でたいいくのときに50メートル走をしました。そのとき、あつ子ちゃんにかちました。とてもうれしかった。

「かえるがさわれるようになった」(4/・)

田中 満

きょう、りかのじかん、アブラナをとりにつたとき、大ちゃんがかえるをもつてきょうしつにもつてはいつてぼくにみせてたらなんだか、かえるがすきになった。

「音楽のこと」(4/・)

西山 絵美子

きょう、3じかんめおんがくしつにいきました。さいしよは、くうきをすうのはくのをして大きなうたをうたいました。いろいろうたいました。

「6だんとべたとびばこ」

渡邊 浩美

わたしは、このまえのたいいくのとき、とびばこの6だんがなかなかとべなかったので、6だんがとべる人を見て、ゆうきがでて、みんながならんでいる後ろに、わたしもならんで、ぼんをまっています。いよいよ、ぼんが、ちかづいてきました。わたしは、前にいたさき子ちゃんに、

「とべるかな。」

といいました。そしたら、さき子ちゃんが、

「わたし、とべるで。」

といいました。わたしは、さき子ちゃんに、

「いいな。」

といいました。

さき子ちゃんのぼんがきて、さき子ちゃんがとんでわたしのぼんがきて、ちよつとへただったけど（次のときは、がんばるぞ）と心の中で思いました。そして後ろにいつて、ぼんがくるまで、すわっていました。またわたしのぼんがきて、（こんどこそとびたい）と心の中でおもいました。わたしのぼんがきて、（いよいよだ、一、二、の三）でいっしゅんにとべました。やったとべた。ほんまにとべたので、7だんをめざしていきました。

「だいプールにさいしょにはいった水えい」

西山 絵美子

だいプールにはいった。わたしは、「だいプールにはいったらおぼれるかもしれない。」と思いました。でもおぼれなかった。もとしげくんとかが、

「だいプールにはいったら、おぼれるわ。」

ていいやるで、いややおもいました。でも、ついでよかつた。でも、だいプールのまんなかはまだつきません。でも、がんばりました。さちよちゃんもわたしのようにできないのです。ふたりといっしゅにがんばっています。みんなは、だいプールのまんなかはつくけれど、わたしはつきません。だからがんばっています。わたしは、プールにはいるとき、いちばんはしっこにいつています。みんな、だいプールのまんなかがいけるのでうらやましいです。きょうプールがあるけれども、おなかいたでやすみました。みんな、きょうプールができるのでいいです。